

ヴィルヘルム・ライヒ論

——性欲と自由——

マリー・ルイズ・ベルネリ
江川 允通 訳

性欲の問題は、その本質によって科学的探究のあらゆる分野に浸透している。このことは、マルクス経済学の教条やクロポトキンの社会学の学説についてなら好んで論じるが、精神分析学者の著作となると最高の疑惑のまなざしで見ようとしないう革命家たちから無視されることが、あまりにも多かった。けれども大衆のあいだにノイローゼが広まっていることは、今日、あまりにもはっきりしている。それは、全体主義国家という尖鋭な形をとっている指導者崇拜において、どきつく見せびらかされている。けれどもいわゆる民主主義諸国においても、それは同様に目立っている。すなわち民主主義国では、ハリウッドの映画製作者によって魅惑的にみえるような形で公衆のサディズムの暴発を起こさせている。また全体主義国家では、ブッヘンヴァルトやベルゼンなどの悪名高いナチの収容所における蛮行という最も粗野な形で爆発している。またそれは、戦争神経症やサディズムや不能症や冷感症などの多数の症例として、さらにはっきりとその姿を現わしている。

こうした問題を家族手当とか出産手当とか老齢年金といった問題

に引き下げてしまうのはバカげたことである、だがそれを暴動とか、支配階級や国家権力の打倒とかによって解決したとしても、それだけでは十分ではない。人間性というものは一全体をなしているのだ。労働者は、たんに農場や工場における生産者であるというだけのものではない。彼は同時に、恋をする男であり、また父親でもある。彼が自分の家庭で直面する問題は、職場において直面する問題とくらべて、彼にとって重要さが劣るというものではないのである。生物学上の、また心理学上の諸問題を、社会学的な諸問題から引き離そうとすると、われわれの理論が不完全なものになるだけでなく、誤った結論に到達せざるをえないことになるのである。

科学のための科学しか念頭にないと言い切る科学者は、ほんの少ししかない。科学者のほとんどすべては、彼らの知識を人類の役に立てたいと思っている。けれども彼らの知識が専門化しているため、このことは極度に困難で、まず不可能だといってもよいだろう。彼ら科学者は、人間を助けて幸福な生活へと導く代わりに、間

違った道につれていくような結論を出している。科学の体系が、込み入った技巧的なものになればなるほど、いっそうそれは有害なものになっている。科学者が人びとに本能に従うことを勧めただけのときは、その効果はごく深いものではなかったかもしれないけれども、しかしそれは方向としては正しいものであった。だが精巧な組織の体系が持ち出されたとき、人は自分の天性からすっかり断絶した生き方に向かって方向づけられたので、なされた害は大きなものだった。

ライヒの著作の価値は、彼が「社会的な意識をもった科学者である」ということにある。また彼が特にわれわれの関心の的となるのは、社会的な意識をもった科学者としてである。彼の心理療法、生物学、生理学についての労作は、ここで考察するにはあまりにも専門的である。彼の臨床的方法がどこまで成功したかについて、あるいは彼のオーゴン式治療法と癌研究における実験の価値について、われわれには判断を下すことはできない。こういったことは医師や精神分析学者が論じるべき事柄である。しかしライヒ博士の著作のうちそれほど専門的でない部分は、現在の社会制度に不満をもち、自由で幸福な世界を目にしたいと欲する人なら誰にとっても研究に価するものである、とわれわれは信じている。不幸にしてこの国（イギリス）では、彼の著作で手に入れられるものは一冊しかない（一九四五年現在）。『オーガズムの機能』がそれであって、ここでわれわれがライヒの学説を示すため要約したのもこの本である。

* The Function of the Orgasm, by Wilhelm Reich, M. D.
Orgone Institute Press, New York, 1942. (渡辺武達訳 太平出版社 一九七〇年)

いての概念は、マルクスのそれよりもバクーニンのそれに近い。前に引用した論文のなかで、彼ははっきりと言っている。

「国家と社会とは、二つの根本的に相違する社会的事実を意味している。ファシストの全体主義国家においていけば、例が示されているように、社会の上にある、あるいは社会と対立しているような国家がある。また原始的な民主的社會のように、国家のない社会もある。本質的に社会の利益の方向に作動する国家組織もあれば、またそのようには作動しないところの別の国家組織もある。忘れてはならないことは、『国家』は『社会』を意味していないということである。この事実について述べた社会学者がソビエトに一人でもいるかということ、ここ二十年間に聞いたことはない。マルクシズムの原理によれば、ソ連邦には社会主義は存在していない、ということになる。すなわち市場経済の廃止ということは、ソ連では全然行なわれていないのである。ソ連に在るのは国家資本主義である。すなわち個々の資本家のいない資本主義があるだけである。」

* 個人の資本主義もまた小規模なものなら存在している。そして「ソビエトの百万長者」という題の共産党のパンフレットのなかで、そのことが認められている。

ライヒが言っていないことは、マルクスは過渡的段階としての労働者の国家を唱道したのだという点であり、マルクスが理解していなかったのは、そのような過渡的な労働者の国家は、市場経済をそれ自体の目的のために使用するような新しい特権階級を興らせるだろうということである。けれどもライヒ博士が唱道した労働民主主義のなかには、国家というものは存在しない（秩序のある法的

總体的にみると、ライヒの労作は左翼と革命運動から無視されてきた。彼の思想のなかに権威主義社会に対する敵意を認めることは、左右両翼の反動勢力にゆだねられてきた。ライヒ博士に反対する狂暴な新聞のキャンペーンが、一九三八年には約十カ月も続けて、ノールウェイにおいて行なわれた。彼はアメリカに移住した。けれどもアメリカにおいても彼は警察による迫害から自由ではなかった。一九四一年十二月十二日午前二時、彼は寝ているところをFBIによってエリス島に連行され、一月五日になって、やっと制限をつけられずに釈放された。彼の著作は、コミュニストからもまたファシストからも、社会主義者からもまた自由主義者からも、禁書とされた。このようにライヒ博士がどこからも受け入れられなかったのは、彼は圧制というものならたえそれがどんな名のもとに変装していようととも攻撃を加えた、ということによって説明されよう。たとえば『国際・性経済雑誌』の一九四四年十月号で、彼は「ドイツのファシズムに対する軍事的勝利の後でさえも、ファシスト的な人間構造は、ドイツにおいても、ロシアにおいても、アメリカにおいても、また他のどこでも、引き続き存在しているだろう」という彼の所信を繰り返して主張したのであった。

ライヒ博士は、マルクシストであるといわれているけれども、彼は、マルクスが彼以前にしたように、「自分はマルクシストではない」と言明している。そして実際、教師の思想と科学的発見を歪めてしまった追従者たちを激しく攻撃している。ライヒは、マルクスによって立てられた経済学の法則に忠実に従っている限りはマルクシストと呼べる（マラテスタが「われわれアナキストはみんなマルクシストだ」といったような意味で）。けれどもライヒの国家につ

国家」なるものは幻想であって現実ではない、財貨は利潤のためではなく必要に応じるために生産される、そして、各個人は自分が生きてゆき、社会的に機能することを責任をもてば一存ではからうことができるだろう。

大多数の精神分析家は、自由で幸福な社会の夢をソ連や計画的権威主義のなかに見るという過ちを犯したが、ライヒ博士は社会の持つ経済的構造を理解していたので、そのような誤りには陥らなかった。ライヒは「社会学的思考のなかへ心理学的方法を」導入する必要を感じていた。マルクスは、人との関係における労働の問題を関心事とした。フロイトは、人の意識と無意識のなかで性欲が演じる役割に関心を抱いた。ライヒはこれら二つの科学の体系の間の衝突を解決しようとした。あるいは、彼はそれら二つの体系の間の接点を見出そうと努めた、と言った方がよいかもしれない。前に引用した論文のなかで、彼はこのことについて次のように言っている。

「そこで、生の二つの基本的な生物学的機能、すなわち『労働』と、『性欲』もしくは『快楽機能』とは、一方ではマルクスの社会学、他方ではフロイトの心理学という二つの相異なる科学において別々に扱われている。マルクスの体系においては、性的過程は『家族の発達』という誤った名称の下にシンデレラのような生活をしている。他方、労働過程は、フロイトの心理学において『昇華』『飢餓本能』あるいは『自我本能』といった誤った名称をつけられて、同様な非運にあってはいる。これら二つの科学の体系は相対立するものであるどころか、それらの創始者は全然分かっていないけれども、われわれの機能的な思考方法によれば、一方では労働において、他方では性欲において、自己

を表現しているところの生きとし生ける生体の、生物としてもついているエネルギーにおいて交会しているのである。」

このことは、われわれがいま考察しているライヒの著書の主題、すなわちオーガズムの機能にわれわれを引きもどす。ライヒにとつて性欲の中心的現象はオーガズムである。それは「心理学はもとより生理学、生物学、ならびに社会学の領域において発生する諸現象の焦点である。」この本の表題は、明らかに、性欲などいやらしいと思う人たちにたいする挑戦として選ばれたものである。そしてこの本自体、ライヒの同僚たちが革命的な知識を喜んで受け入れてくれるだろうという彼の幻想がまだ失われてしまわない年代において書かれたのだと、ユーモアをまじえて、ライヒ博士は言っている。ライヒは、彼の前に、フロイトが晩年その性欲についての学説に水を割って初期の著作と矛盾するものにしてしまった、という例を見ている。ライヒはあまりにも性欲に重要性を置きすぎると非難されて、精神分析家の協会から追放され、協会員の著作はライヒに与えられないようにされた。それゆえライヒは、偽善的で道学家的な社会がどのように科学者にたいして圧力を加え、その見解を一般の人びとの好みにあうようなものに変えてしまいか知っていたのである。

ライヒは精神分析の基礎的概念を堅持したけれども、精神分析界が反動派にも受け入れてもらえるように性欲を二流の役に引き下げたときには、精神分析学界に従うことを拒否した。ドイツで書かれたこのライヒ博士の著作を英訳したセオドア・P・ウルフは言っている。

「フロイトの性欲についてのものとの学説は革命的であつて、最高に激しい反発を巻き起こした。精神分析の来歴は、世界の

なかの、精神分析によってショックを受けた部分において、このような反発をやわらげようとする、終ることのない試みの歴史である。そして精神分析を社会から受け入れてもらえるものにするには、性欲はその真の意義を奪われ、何か他のものによって置き換えられなければならないかった。こうして、ユンクはそれを宗教哲学と、アドラーはそれを道学者的哲学と、ランクはそれを『出生外傷』と……等々……に置き換えたのである。」ウルフ博士は言う。アメリカにおいて、

「われわれは社会学的な精神分析のいろんな学派が發展しているのを目にしている。それらの説くところはいつも簡単に誤りに導くもので、それらはいへん危険である。あからさまにであろうと、多くの学術用語や新造語句に埋もれていようと、それらが説くところは『ノイローゼの病因論における重要な病因は性欲ではなくて、社会的要因だ』ということである。このような論議は、性欲にたいする恐れと、社会的要因というものが必要だということを、不明瞭で混乱してはいても広く一般の人びとが共通して本当だと思っていることのために、大変人びとに受けている。」

他方ライヒ博士は、ノイローゼの病因論についてのフロイトの最初の公式、すなわち「ノイローゼは、本能的欲求とこれと対抗する社会の要求との間の葛藤の結果である」というのを忠実に守った。それゆえノイローゼを理解するためには、性欲と社会の力が双方とも理解されなければならない、ということになる。

ウルフは言う、「ライヒ博士は、オーガズムの過程だけでなく、ノイローゼ患者を大勢つくりだすような仕方でもオーガズムの過程に

影響を与えている社会的条件をも研究した第一人者であつた。」

彼は研究材料を精神分析家の応接室で集めただけではなかった。労働者階級相手の診療所における、大衆集会における、民衆との日常の接触からも集めたのであつた。彼の結論が、浮世の荒波から保護されたブルジョアの家からの患者を扱う精神分析家のそれとは、必然的に違ってくるはずである。

このことは、彼が、ノイローゼをプテブル的な疾患であると認めた、ということの意味するものではない。それどころか労働者階級は、それよりも保護を受けている階級と同じくらい、ノイローゼにかかりやすい。そして労働者階級のなかでこそ、ノイローゼは知的な優雅さによって仮装されない激烈で粗暴な様相を呈する。このような広範な臨床的経験から、また彼が集めた統計から、彼は非常に多くの人びとが、多かれ少なかれ希釈された形ではあるにしても、ノイローゼにかかっているという結論を立てた。これらのノイローゼはすべて、例外なしに、男性においても女性においても性生活の攪乱によって起こされたものであることは、特に男性の場合については、健康な性生活とは何かということを厳密に規定したときに、やつと彼にとつて明らかになった。「心の健康」とは、「オーガズムに達しうる能力、すなわち自然な性行為における性的興奮のアクメに没入しうる能力に依拠するものである」ということを彼は発見した。

ライヒ以前には、精神分析家は性交のできる人が性的に健康なのだと考えていた。それゆえ彼らは、ノイローゼ患者も正常な性生活を営むことができると主張した。ライヒは、オーガズムの反応をごく詳細に分析することによって、ノイローゼ患者であつてオーガズ

ムに達しうる能力をもつものはないということを見出した。彼はさらに、今日ノイローゼがはびこっているのは権力に基づく社会によって引き起こされた性的混沌によるものである、ということを立て証した。すなわち、ノイローゼは家父長的社会秩序が発達する以前の人類史には見られなかったし、今日でも自由な社会においては存在していない。自由な社会においては、

「自然のままの状態での生のエネルギーは、強制的な義務や強制的な道徳などなくとも、自ら進んでそれ自身を規制する。強制的な義務や道徳は、反社会的な傾向が存在していることの確実な指標である。反社会的行動は、その存在が自然のままの性欲にたいする抑制によつて、二つの二次的衝動から発生するものである。」

「ある人が生と性を否定する雰囲気なかで育つと、肉筋の慢性のけいれんとして生理学的に表現されるような快楽不安（快楽的興奮を経験することにたいする恐れ）をもつようになる。この快楽不安は、このように育った個人が、独裁の基礎となるような生を否定するイデオロギーをその上で再生産する土壌となる……人類の平均的な性格構造は、無力で生を恐れるような方向へと変わってしまった。そのため権威主義的独裁は、責任の欠如とか幼稚症といった現在あるような人間の態度に向かうことによつて、地歩を確立することができるのである。」

人びとはどのようにして彼らの愛と生の本能を押しつぶしてしまつたのだろうか？ 人にとって、快楽を経験し自由を楽しむことは、生物学的に不可能なのだろうか？ ライヒは、その原因は生物学的なものではなく、経済的、社会学的なものである、と言う。それ

は、生の力の自然な自己規制を破壊してしまつたところの強制的家族と強制的道徳である。マリノフスキーによる南洋の島々における未開人の性生活についての研究が、性的抑圧は社会学的な性質のものであつて、生物学的な性質のものではない、ということを示している。それはさらに、親子関係は、社会のもつ社会構造とともに変わるものだということを示すことによって、エディプス葛藤は生物学的な性質のものであるというフロイト式の考え方を打ち砕いた。ヨーロッパ人のもつエディプス葛藤は、トロブリアンド諸島の人びとの間には存在していないのである。

このことは、もしも性的抑圧が生物学的に決定されるものなら、その除去は不可能だということになるし、またもしもそれが社会的要因によって決定されるのなら、社会的要因を変化させることによって性的抑圧を終わらせるだろうということになるので、ごく重要な問題点である。マリノフスキーの観察によれば、

「トロブリアンド諸島の子供たちは、性に対する抑圧や性の秘密というものは全然知らない。彼らの性生活は、生のあらゆる段階を通じて、自然のまま、自由に、束縛されることなく、十分な満足をもつて展開させることを許されている。……トロブリアンド諸島の人びとの社会は、今世紀の二十年代になつても、性的倒錯も、機能的精神病も、精神神経症も、性の問題から起きる殺人も、全然知らないでいる。彼らは窃盗にあたる語をもっていない。同性愛やマスターベーションは、彼らにとっては、性的満足のための不自然で不完全な手段、自然な満足に達する能力が障害を受けているし、以外の何ものをも意味していない。……それゆゑトロブリアンド諸島の人びとは、自

性格全体が改造され、彼らの屈従性は消失した、彼らは不条理な道徳律に対し、教会の教えに対し、彼らの労働の単調さと無用さに対して反逆した。彼らは性の満足がえられないような愛なき結婚をあきらめのもとに受け入れるようなことを拒否した。彼らは自分のイニシアティブと創造性を用いなくてもよいような労働をすることを拒んだ。彼らは自分の自然権を主張する必要を感じ、そのためには、現在のとほ違ふ種類の社会が必要なのだとということを自覚した。

「性的(精神)構造を備えた個人(つまり性器人間)にとつては、性感は快楽の経験であつて、それ以外の何ものでもない。労働は楽しく生き生きとした活動であり、何かを成し遂げることである。だが、道徳的に構造化された個人(つまり道徳人間)にとつては、労働は重荷となる義務であり、もしくは単に生計を立てるための手段にすぎないものである。……治療という仕事は、神経症的性格を性的性格に変え、道徳による規制を自分自身による規制に置き換えることにある。」

このことがどのようにしてなされたかを、ライヒ博士はいくつもの事例報告のなかで示している。彼は「ノイローゼの本質は、患者に(前に定義したオーガズムに達する能力という意味での)満足を得る能力がないことである」という観察を下している。彼以前にもフロイトはその初期の労作のなかで「不安のエネルギーは抑圧された性欲のエネルギーである」と言明している。しかし精神分析家は性器性の障害はノイローゼのいろいろな症候があるうちの一つであると考えていたが、ライヒは、それこそノイローゼの症候そのものであるということを立てた。

分から進んで清潔であり、秩序正しく、強制されなくても社会的で、知的で、勤勉である。……マリノフスキーがトロブリアンド諸島の人びとについての研究をした当時、数マイル先のアムフレット諸島には、家長制的で権威的な家族組織をもった部族が住んでいた。これらの島々の住民は、すでに不信、不安、ノイローゼ、倒錯、自殺等々のようなヨーロッパのノイローゼ患者のもつ特徴のすべてを示していた。」

このような観察から「ある社会に住む人びとと総体の精神的健康を決定する要因は、彼らの自然な恋愛生活の状態である」という結論がえられよう。

マリノフスキーの研究は、もう一つ重要な事実を明らかにしている。トロブリアンド諸島の人びとのなかには、経済的に有利な結婚が予定されているために、性の自由を許されていない一群の子供たちがいる。このような子供たちは性的禁欲のうちに育てられている、そして彼らは他の子供たちの間には見られないようなノイローゼと屈従性を示している。このことから、ライヒは次のような結論を立てている。

「性的抑制は、経済的隷属をつくりだすための不可欠な手段である。このように、幼児と思春期の若い人たちの間における性の抑制は、精神分析が——伝統的なそして誤りに満ちた教育の諸概念と一致して——主張しているように、文化の発達や、社会性や、勤勉と清潔さの前提条件であるどころか、その正反対なのだ。」

このことはライヒによる彼の患者についての観察によって確認されている。ノイローゼの患者が健康な性生活を回復すると、彼らの

「ノイローゼを起こすエネルギーの源泉は、充積された性エネルギーと放出される性エネルギーとの間の量の差にある。神経症的な心的装置は、放出されないで残っている性のエネルギーの不断の存在によって健康な心的装置と区別される。」

「フロイトの治療法の公式は、正しいけれども不完全である。治療のためにまず必要な条件は、抑圧された性欲を患者が意識することである、というのはほんとうだ。しかしながら、それだけでも治療の効果を与えることもできるであろうが、必ずしもそうなるとは限らない。これだけで治療という結果がえられるのは、それと同時に、エネルギー源、すなわち性的うっ積(性エネルギーのせき止め)が除去されるときだけである。言い換えれば、もしも本能の要求についての自覚が完全なオーガズムによる満足と相並んで行なわれるならば、始めて本能の要求についての自覚は治療の効果をもたらすのである。その場合、病的な精神の生長は、源泉においてエネルギーを奪われる。」

ライヒは(彼がうっ積ノイローゼと呼ぶ)現実神経症、および精神神経症の形成について記述するにあたって、まず、性的興奮は明確に身体的過程であるということ、また神経的葛藤は心的な性質のものであるということから説き起こしている。軽微な心的葛藤は、軽微な身体的うっ積、もしくはこんどはそれが心の葛藤を強めるような性エネルギーのせき止めをつくりだすであろう。そして、こうして強められた心の葛藤は、さらにうっ積を強化するということになるだろう。もともとなる心の葛藤は、性的な親子間葛藤のなかにはいつでも存在している。そしてもしもそれが現実のうっ積によって

育成されるなら、それは神経症や精神神経症を引き起こす。だが現実のうつ積は、積極的な性的満足によって除去することができ、それによって最初の心の葛藤はそれ自体をノイローゼに変形させるエネルギーを失うようになる。たとえばマスターベーションによる満足によるだけにしても、心の葛藤と身体的うつ積との間の循環は断ち切れなくてはならない。患者が性的な満足を与えられるようにするために、彼の性欲に対する性格のよい、破壊することが必要である。ライヒ博士は性格分析の成長療法（よよいを着ていること）を解きほぐすことによって、生々精神的運動性を回復する、というものである。「硬直」という語は、文字通りに意味をとられなくてはならない。ノイローゼ患者が性の快い興奮に対して自分からよよいをまとうのは、彼の筋肉、特に生殖器の周囲の筋肉の収縮によってなされるのであり、呼吸を抑止することによってなされるのである。

今日すぐ多数のノイローゼが発生していることを考えると、ライヒ博士がこれらのノイローゼ全部に対して彼の成長療法を適用できると信じていたのではなかった、ということは明らかであろう。しかし彼は、ノイローゼの予防法を開発することを特に重視した。彼の性衛生診療所における経験から、大衆集会や青年のグループで集められた統計から、彼は、事態は「ノイローゼの防止のための広範な社会的処置」を要求しているのだという確信を抱いた。それを実行に移すために彼が提議したことは大変興味のあるものである。けれどもそれらについてここで論じるのは不可能である。だがライヒ博士は、子供と思春期の若い人たちの性欲が、権威的な家族や教

会や学校による圧制から完全に解放されるのを目にしたいと思っていたのだ、といえは十分であろう。彼はまた、成人が強制的な結婚と強制的な道徳から自由になるのを見たいと思っていた。彼は、本能生活への復帰、すなわち理性への復帰を見たいと思っていた。このことの特質を、彼は「生きているものは本質的に理性をもっている」と言うことによって明らかにしている。

このような、愛の、労働の、科学の自由は、「労働民主主義において、すなわち労働過程の自然な組織に基づく民主主義」によってえられる、と彼は考えた。どのようにしたらこの労働民主主義が実現できるか、またそれはどんな形をとるであろうか、ということとは、どちらかというときまだぼんやりしたままである。けれどもそれは自由な社会であろう、ということについては疑いはいらない。「自然な道徳的行動は、自然のままの性的過程の自由を前提とする。」（中略）

「人びとによって行使される社会力は……労働し生産する大衆が精神的に独立し、彼らの社会的存在に対して全責任をもつことができ、彼らの生活を自分自身で理性に従って決定することができるようになるまで、現われもしなければ効力をもつようにならないであろう。」

もしもライヒ博士が、革命のさなかのスペインにおける工業共同体や農業共同体の形成を眼のあたり見ていたならば、彼の労働民主主義は、もっと具体的な形をとっていたであろう。彼はまた工業の発達を人類の性的解放のための要因のうちの一つであると思っていたようである。このことも、同様に、きっと彼がスペインやイタリアのような農業国についての知識をもっていなかったためだろう。そ

これらの農業国においては、工業化された諸国と比べると、ノイローゼはずっと少ないのである。

「純粋に民主的な試み」の実例として彼が提示したのは、合衆国における「労働—経営委員会」であった。それは労働者が生産と分配の管理に参与するものである。だが、このような例を彼が挙げたことは残念である。労働—経営委員会があれば、労働者も経営における責任を分担することになる、というのはほんとうである。しかし彼らは自分自身の主人になったわけではない。資本家がいなくなったわけではないし、資本家は労働者を支配することができるのである。

ライヒ博士はピンク色の色めがねを通してこの世を見ていたのではない。彼はこの世界におけるあらゆる腐敗と悲惨さ、あらゆる不条理と醜さを見た、けれども彼は絶望しなかった。彼は生きているものに信頼をおいた。なぜなら彼には、人間はその生得の本能を自然に発展させる自由を持っていないと、反社会的で、屈從的で、残忍でマゾヒスティックになる、ということがわかっていたからである。

ライヒ博士の学説の重要性は、非常に大きなものである。教養のある人びとにとって、精神分析の深遠さを愛好する人びとにとって、彼の明快さ、彼の常識的であること、彼の直接的なアプローチは、あまりにも単純すぎるようにみえるかもしれない。けれども、頭の体操を求めるのでなくて、人類が近寄っているようにみえる破滅から人類を救うための手段を求める人びとにとっては、この本は援助と激励の独自のみなもととなるだろう。アナキストにとって、人間性に対する、家族、教会、そして国家の権力・権威からの完全

な自由に対する基本的な信仰についてはよくわかっている。けれどもこの信仰を支えるために提唱される科学的な理論こそ、アナキストの学理的知識を増進するためそれに付加することが必要欠くべからざるものであろう。

〔定義〕

オーガズム反射 一つの生体全体の性行為のアクメにおいての一体となつている不随的収縮と膨張。

オーガズム不能 オーガズムに達する能力の欠如。これは現代の平均的人間の最も重要な特徴であり、生体の生物学的エネルギーのせき止めによって——あらゆる種類の心的および身体的症候にエネルギー源を供給する。

オーガズム（に達しうる）能力 本質的に、性行為のアクメにおける生体の不随的収縮に完全に没入し、性的興奮を完全に解除する能力。神経症的な人は必ずこの能力を欠いている。この能力は性器的性格の存在もしくは確立、すなわち病的な性格のよいと筋肉の状態としてのよよいの不存在を前提とする。この概念は、本質については知られていない、そして通常勃起能力と射精能力から区別されない。勃起能力と射精能力は、両方ともオーガズム能力の前提要件以外の何ものでもない。

うつ積 生体の性エネルギーのせき止め、それによってノイローゼを起こすエネルギー源となる。

うつ積不安 生体の周辺のなオーガズムによる放出が制止されるとき、生体の中心における性エネルギーのうつ積によって起こされる不安。フロイトの「現実不安」actual anxietyと同じ。

うつ精神神経症

最初はフロイトの「現実神経症」actual neuroseと同じ。この概念は、今では、性エネルギーのうっ積の直接の結果であるあらゆる身体的障害を含んでいる。

成長療法 vegetotherapy 性経済による治療技術。治療の目標が拘束された成長エネルギーを解放し、それによって患者に成長的運動性を回復させようというもので、こう呼ばれる。

〔オーガズムの機能〕より

〔註記〕 筆者マリ・ルイズ・ベルネリ Marie Louise Berneri は、

自由獲得の能力とは、人間の生物学的なエネルギーを認識し、それを促進する意志であり能力である。人間の生体としての成長が抑圧されたり怖れられたりするかぎり、自由を理解することはできない。

正しい政治の影響を受けるなら大衆は戦争待望の権力を忌避する。第一次世界大戦では死の商人がそうであったし、第二次世界大戦では気の狂った將軍がそうであった。だがこれは責任転嫁の論理である。戦争に対する非難は、ひとえに戦争防止の手段いっさいを握る同じ人民大衆にのみ帰属する。この同じ人民大衆——かれらは部分的には怠惰で受動的に、また部分的には積極的に行動する——は、かれら自身、恐るべき被害を受ける破局をつくりだす。大衆のこの欠点を強調し、かれらに十分な責任を与えるのは、かれらをまじめに考えるのと同じ意味である。反対に大衆を哀れな犠牲者として同情するのは、かれらを無力な子供のようにみなすのと同じ意味である。前者は真の自由のためにたたかう闘士の態度であり、後者は一般に政治家の態度である。

ライヒ『ファシズムの大衆心理』(平田武靖訳 せりか書房)

社会についての十九世紀のかがえ方は純粹に経済的なことにかぎられていて、われわれが二十世紀の文化闘争にみいだすイデオロギーの層のできかたにはあてはまらない。現在の社会闘争を、もつともかんたんな公式にちぢめると、生活を保護し、肯定する一方の勢力と、生活を破壊し抑圧する他方の勢力とのあいだのあらそいだ。根本的な社会的な質問はもう「おまえは金もちか貧乏人か？」ではない。それはこうなった。「人間が生きていくことの最大限の自由をまもることに賛成して、そのためにたたかうか？ おおぜいのはたらく人々を、思考においても行動にたたかうも生き方においても独立させ、近い将来、人間生活の完全な自律があたりまえのことになるように、実際におまえの力でできるだけのことをするか？」

ライヒ『性と文化の革命』(中尾ハジメ訳 勁草書房)

自由を獲得したいと願う衝動は、生命力をもった生体の発展を意味する。この衝動は、生物学上の発展法則の枠組でのみ理解できるのであって、他の法則では理解不可能である。自由の意志と